

『ジェイン・エア』に見るメタファーとしての読書

緒 方 孝 文

Reading as a Metaphor in *Jane Eyre*

Takafumi OGATA

ABSTRACT

“Your face, my Thane, is as a book where men may read strange matters.”

—— Lady Macbeth, from *Macbeth*, Act I, Scene v ——

Charlotte Brontë, who was an avid reader¹⁾ in her childhood, allowed Jane Eyre to encounter a variety of books throughout the story. Books, however, function not as didactic tools in a quest for maturing in a Bildungsroman context, but as a metaphor for ‘reading’ people, the world, and her own inner self. Both Jane and Rochester “read” each other’s countenances —— the eyes, behavior and the mind of the other are subject matter for study.

Jane draws pictures of other people and of herself, and this is another connotation of reading, because “Picture Reading” is primarily possible using the imagination in this novelistic fairy-tale context. Jane’s integrity is rooted in Romanticism, where she sees things as pictures to be interpreted through her imagination. The romance between Jane and Rochester is an exemplar of a fairy-tale book read by Jane metaphorically.

◆ジェイン・エアと読書

いわゆる教養小説においては、「本」または「読書」は主人公の人格形成の重要な要素になるのが常である。『ジェイン・エア』を教養小説とみなすかどうかは議論の余地があるが、少なくとも形式的には主人公のクロノジカルな成長の記録という教養小説的枠組みをもったこの小説において、ジェインは常に「本」との関係性²⁾の中で生きている。孤児ではあるものの、ジェインは学校教育を受けた教養のある子女であり、読書量はとりたてて少ないわけではない。モートンの小学校で教職に就いたジェインは、20人

の生徒の内、読むことができる者が3人しかないことに驚くが、当時の一般的な状況から考えると、むしろ書棚のある家々に住めたこと自体が幸運と思わなければならない。彼女にとって「本」または「読書」はどういう意味をもっているのだろうか。そして、それは成長の過程とともに変化していくものなのだろうか。

ゲイツヘッドのリード家でジェインが最初に手にする本はビューイックの『英国鳥禽史』であるが、彼女が本棚からこの本を選んだ理由は「その本の中に挿絵がたくさん入っていた」

(14) からである。子供の多くがそうであるように、8歳のジェインにとって「本」は知識の享受というディダクティックな意味よりも、単に想像の世界をふくらませる娯楽的道具として機能している。

しかしながら、後にロマンティシズムの至上性を生存の核とするようになるジェインの場合、想像力を活躍させる場としての「本」の役割はとりわけ重要である。それはちょうど、乳母のベシーが語ってくれるお伽話、恋物語、冒険談などと同じ効果をジェインの心にもたらすのである。「赤い部屋」への監禁によって心身ともに消耗したジェインにベシーはパイを持ってくるが、ジェインはそうした物質的な食べ物よりも、むしろ挿絵に満ちた『ガリヴァー旅行記』という精神的滋養物を要求する。つまり、本は想像力の開放の場としてジェインのすきんだ心に生氣を吹き込む役割を担っている。さらに、彼女はリード夫人への憤りを『アラビアン・ナイト』という想像の世界に遊ぶことによって慰める。

I took a book—some Arabian tales ; I sat down and endeavoured to read. I could make no sense of the subject ; my own thoughts swam always between me and the page I had usually found fascinating.

(Chap. 4, p. 47)

ジェインにとって read とは、書かれた文字を読み主題や内容を理解することではなく、挿絵を通して想像の翼を羽撃させることにほかならないのである。

後に成長したジェインは病床のリード夫人の見舞いにリード家に戻るが、自身のロマンティシズム的価値観形成の基盤となった『英国鳥禽史』『ガリヴァー旅行記』『アラビアン・ナイト』の3冊の本が、昔のまま本棚にあることを見逃

さない。大人になったジェインの存在基盤が、幼少期に育んだロマンティックな読書体験にあることが示唆されている。第1段階の中心的行為である、ジェインから本を奪って彼女に投げ返し負傷させるというジョン・リードの暴力は、本のロマンティシズムの中に生の基盤を求めるジェインの生き方そのものを否定する行為であるという点で非常に象徴的である。

同じ「本」であっても、ジェインは自分を慈善施設に送るためにやってきたブロックルハースト氏がくれた『教え草』といういわば教訓本を、意味のないものとしてリード夫人に突き返す。つまり、知識や教訓を与えるものとしての「本」の効用にジェインは理解を示さない。さらに、『詩篇』（『旧約聖書』中の一書）は好きかというブロックルハースト氏の質問に、「『詩篇』はおもしろくないのです」(42)と答えて言語的な読解力・理解力の不足を告白する。彼女は確かにゴールドスミス『ローマ史』のような難解な本も読んではいるが、それは深遠な思想を学ぶためではなく、そこに登場するネロやキャリギュラのイメージ（後にジョン・リードの暴君性に重ね合わせる）を想像力でふくらませるというような印象的・感覚的な読書を楽しむためである。

ジェインが知的滋養物としての「本」に接するのは、ローウッドにおけるヘレン・バーンズやテンプル先生を通してである。ジェインとヘレンとの出会いは、サミュエル・ジョンソンの『ラセラス』を熱心に読んでいるヘレンにジェインがひどく引き付けられることがきっかけになる。しかし、内容を読みこなし理解することのできないジェインは、妖精も妖鬼も出てこないこの本をおもしろくないと感じ、すぐにヘレンの手に返してしまう。ジェインにとって、それは単に「細かく印刷されたページ」という物

質にすぎず、自分の創造性を刺激し発揮させる何の「輝かしい変化」(60)も探ることができない代物なのである。

ヘレンは学校のテキスト以外にも個人的に広く多くの本に接しているが、彼女の場合の読書には、ジェインのように単に個人的な趣味の要素だけではなく、学校教育にもとづいた知的で教養的な要素が強くうかがえる。「本を読む」ということが挿絵を通して想像を広げることを意味していたジェインは、ここで初めて、知識としての読書、つまり印刷された文字を読み内容を解釈するという読書の知的な側面を学ぶのである。

..... they (Helen and Miss Temple) spoke of books : how many they had read! What stores of knowledge they possessed! Then they seemed so familiar with French names and French authors : but my amazement reached its climax when Miss Temple asked Helen if she sometimes snatched a moment to recall the Latin her father had taught her, and taking a book from a shelf, bade her read and construe a page of 'Virgil' ; and Helen obeyed, my organ of Veneration expanding at every sounding line. (Chap. 8, pp. 85-86)

ジェインがローウッドで身につけた学校教育としての知識は、具体的に言えばフランス語やドイツ語といった語学であり、音楽であり、美術(写生画)である。そして、実際にこれらの知識があったがために、彼女はソーンフィールドでガヴァネスの職を得られるのであるから、これらはいわば実用的な知識であると言えよう。しかし、皮肉なことに、ジェインが生の基盤として求めているものは実はこうした実用的・教

訓的な知識ではなく、自らの魂を開放できる、いわば娯乐的・趣味的要素をもった読書なのである。

もちろん、キリスト教の禁欲主義にもとづく生き方を肯定するヘレンの愛読書が『聖書』であったことは言うまでもない。リード家への怒りと復讐心に燃えるジェインに対してヘレンは『新約聖書』を読むことを勧めるが、所詮聖女ではないジェインにとって「汝等の敵を愛せ」という教義は到底受け入れられないものであった。先に、ジェインはブロックルハースト氏に対して、黙示録、ダニエル、創世記、サムエル、出エジプト記などが好きだと答えて、かなり『聖書』に精通しているという印象を与える。事実、この小説には『聖書』からの引用が頻出するが、ほとんどの場合、ロチェスターとの結婚後十年経ったジェインのナレーション、または作者のコメントとして出てくるわけであり、登場人物としてのジェイン自身に知識としての『聖書』が多大な影響を与えているとは言い切れないように思われる。

ジェインとロチェスターの恋愛という中心主題が展開するソーンフィールドの場面では、前の2つの段階でのように具体的な書名が出てくることはない。最初の面接で、本はたくさん読んだかというロチェスターの質問に、ジェインは「ただ、私の手に入りましたようなものだけで、それも、たくさんではありませんし、大して程度の高いものではございません」(140)と当たり障りのない答をするだけである。ソーンフィールドでの最初の数週間を、ジェインは主人であるロチェスター不在のまま教え子のアデールとともに図書室で過ごす。ローウッドに比べ蔵書量は多いとはいえるものの、取り立てて読書家を喜ばせるほどの量があるわけではない。しかも、ロチェスターが戻ってきた途端に、図

書室は訪問者たちのための応接間に変わってしまい、ジェインとアデルは2階の一室に移動を余儀なくされてしまうのである。ジプシーの占い師に変装したロチェスターがジェインの心を読み取るというクライマックスも、場所がロチェスターの書斎であるにもかかわらず、具体的に何らかの本が話題になることはない。わずかにイングラム嬢が暇な時間を読書で過ごす（実際には本を手にはしているだけで、内容を読まない）が、ジェインは彼女の読書にも否定的である。なぜなら、イングラム嬢は「いつも書物の中の大げさな言葉を繰り返すが、彼女自身の意見を示すことはなかった」し、「同情心も憐れみの心も持っていなかった」（317）からである。第3段階が主人公の恋愛というプロット上のクライマックスであるにもかかわらず、彼らに何らかの影響をもつ「本」が具体的にほとんど取り上げられないのは、これまでの2つの段階と比べると（あるいはこの後の第4段階で再び「本」が頻出することを考えると）、不思議な感じを免れず、そこに何らかの創作上の意図を感じざるをえない。

情熱の人物ロチェスターと対照的な理性の人物セント・ジョンが登場するマーシュ・エンドの場面は、ジェインが放浪の果てに辿り着いた一軒家の窓から、姉妹がドイツ語の本（ドイツの詩人シラーの作品）に心を奪われ、暗唱や議論をしているところをのぞき見することから始まる。ダイアナとメアリー姉妹は、非常な読書家であった先代のリヴァーズ夫人に似て、ジェインよりも多読家である。ジェインは彼女たちが貸してくれる本をむさぼり読み、昼の間に読んだものについて晩に彼女たちと批評するのを楽しみにする。リヴァーズ姉妹が具体的にどのような本を読んでいたのかは明らかではないが、ジェインと意見や趣味を同じくしていることを

考えると、小説や物語の類も多かったのではないかと想像できる。

一方、兄のセント・ジョンも「食事時に本を読むのは、彼の人づきあいの悪いくせであった」（440）とジェインがコメントしているように、読書家ではあるものの（実際、体力を快復したジェインが初めて彼に直面する時にも、彼はじっと本のページに目を注いだままで唇は堅く結んだままである）、その目的は伝道師としての教義を学ぶためのものである。彼の読書は本から人生訓を学ぶヘレン・バーンズと基本的には同じであるが、ヘレンが個人的な心の問題として本を読んでいるのに対して、彼の場合は伝導師という職業的義務感が強く伴っている。

..... though, more than once, my (Jane's) fast falling tears blistered the page over which we (Jane and St John) both bent, they produced no more effect on him than if his heart had been really a matter of stone or metal. (Chap. 35, p. 458)

ジェインがセント・ジョンの読書に何ら引き付けられないのは、彼の読書が感情を抜きにした教義の受容で終始しているためである。たとえば、彼のジェインへのプロポーズが人間の感情の問題ではなく、「ぼくは、あなたにドイツ語をやめて、インド語を勉強してもらいたいのです」（296）と遠回しに理性的な語学の問題にすり替えられているところに、ジェインが彼に同意できない本質があるのである。実際、ジェインは早い段階から、読書をするセント・ジョンの姿を見つめながら、この人とは結婚できないことを悟る。

..... As I looked at his (St John's) lofty forehead, still and pale as a white stone—at

his fine lineaments fixed in study—I comprehended all at once that he would hardly make a good husband. (Chap. 34, p. 438)

石のようにじっとして変化のないセント・ジョンの額は、ジェインにとっては「読む」(read)対象ではなく、単に見る (look) ものとされている。セント・ジョンは一般にロチェスターとの対比によって「氷の人」と解釈されがちであるが、ロザモンド・オリヴァーとの恋愛に見られるように、彼も本質的には恋愛をし詩を読む人間である。事実、彼はある日、ジェインにウォルター・スコットの『マーミオン』³⁾を持ってくる(ここで作者は純良な詩が人間の魂に与える効用を力説している)が、新刊書であるから、わざわざジェインのために買ったものと思われる。ジェインがセント・ジョンについて問題としているのは、彼にもともと人間的感情が欠乏しているということではなく、それを宗教的な義務感のもとに抑制しようとする彼の抑圧的姿勢のためである。人間として当然もっている感情を宗教的・職業的な義務感という大義名分のもとに押し殺そうとするセント・ジョンは、ジェインには到底理解できない人物として捉えられる。

ジェインとセント・ジョンとの間に恋愛が成り立たないのは、セント・ジョンの話す言葉や顔・目の表情をジェインが読み取れないというリテラシーの食い違いとして説明することができる。因習的な悦楽を離れて伝導という天から与えられた使命を果たせというセント・ジョンの説得の言葉は、ジェインにとっては「まるでギリシャ語を話しているみたい」(436)に感じられる。ジェインと二人きりの散歩で口にした彼の言葉は「奇怪な愛の奇怪な言葉」(447)にすぎなかったし、そもそも二人の間では「愛という言葉そのものが、不和の種」(455)なので

ある。ジェインにとって彼はまさしく「物を言わない本」(422)であり、彼の顔が読めないように、「読む」ことが不可能な存在なのである。ただし、セント・ジョンの名誉のために言っておくが、これらはジェインの側からの見方であって、後述するように、セント・ジョンがジェインの本質を「読み取る」場面は少なからずあることを付け加えておきたい。

第5段階のファーンデーンでは盲目となったロチェスターが登場する。視力の喪失は当然読書が不可能であることを意味し、したがって彼の目となって本を読むことがジェインの重要な役割になる。しかし第3段階と同様に、ここでも具体的な書名を挙げてジェインがロチェスターに本を読んでいる場面は実際に描写されることはない。

..... Literally, I was (what he often called me) the apple of his eye. He saw nature—he saw books through me ; and never did I weary of gazing for his behalf, and of putting into words the effect of field, tree, town, river, cloud, sunbeam—of the landscape before us ; (Chap. 38, p. 500)

ここでは、本を「読む」ことは自然を「見る」ことと同等に置かれている。read books の代わりに saw books と書かれていることや、風景を言葉にするということは、描写しようとする対象物の「効果 (effect) を言葉にする」ことであるという認識に注目しておきたい。

ジェインのクロノロジカルな成長にしたがって、「本」または「読書」との関連性をまとめてみると、第1段階(ゲイツヘッド)、第2段階(ローウッド)、及び第4段階(マーシュ・エンド)

において具体的な書名を挙げた読書の描写が多いのに対して、ロチェスターとの恋愛―結婚という中心主題を描いた第3段階（ソーンフィールド）と第5段階（ファーンティーン）ではほとんど読書の場面も具体的な書名も描写されていないことがわかる。しかも内容的に言うと、人生訓を与えるような実学的な本や読書は否定されていて、幼少期に読んだ想像力を刺激するようなお伽話や妖精物語に常にジェインの関心は向いているのである。

ここで2つのことに注意したい。第一に、ジェインの読書への関心が挿絵をもった妖精物語に集約されていることは、彼女の読書が幼児的であり未成熟であるということの意味しない。なぜなら、ジェインの本質は彼女の成長過程に関係なく一貫してロマンティシズムの価値観にあり、そこでは想像力を駆使した創造性が最も重視されているからである。想像力によるイメージの産出は、ジェインにとっては自己認識の過程において不可欠なものである。イーザー⁴⁾が言うように、イメージによる「非現実化は、読者が言語記号そのものによっては指示されていないものをイメージの中で現実としてとらえる場を設定する」からである。また、読書論の立場から言えば、マングェルが『読書の歴史』の“Picture Reading”⁵⁾という章で述べているように、中世以来、挿絵は書物の読解の上で本文にも劣らず重要な役割を果たしていて、15世紀に印刷本が現われてからも一般的になっていたのである（彼は代表的な本として、絵本の体裁をとった『貧者の聖書』を挙げている）。つまり、挿絵は読書の上で補足的にあるのではなく、読者はまるで文字を読むように絵を「読む」ことによって創造力を刺激され、主題を読み解いていく。ロマンティシズムの価値観を人生の指針として肯定するジェインの原体験としての読書が絵本的な挿絵の書であったことは、充分う

なずけることである。

第二に、ジェインは知識や教訓を与える本にはあまり引き付けられないと述べたが、ジェイン自身が本を内容的に類型化し、区別しているわけでは決してない。問題なのは本自体の内容ではなく、本を「読む」という行為の意味づけである。ジェインの場合は、教訓性や知識性を超越した、生の基盤となる現実認識というコンテキストの中で「読書」の意味を捉えようとしているのである。初めに述べたように、教養小説において読書は主人公の精神的成長を育む重要な要素であるが、『ジェイン・エア』がドイツに始まった正統的な教養小説の流れからいささか逸脱していると考えざるをえないのは、「読書」が成長の過程としての現実への開眼という役目を果たしておらず、むしろロマンティシズムの絶対性への確信を強める要素になっているからである。「読書」は教養の終焉として現実に戻帰するための単なる通過儀礼としての道具ではなく、ロマンティシズムという迷宮そのものを表わす本質的な表現として作用している。その意味では、ジェインの読書観、人生観は作品を通して一貫して変わらないのである。

このように考えてくると、ロチェスターとの恋愛を扱った、そして具体的な「本」が登場しない第3段階、第5段階はお伽話の要素が多分に含まれていて、それ自体が妖精物語―つまりひとつの「本」―であるように仕組まれているという解釈ができるのではないだろうか。⁶⁾ジェインの読書の目的が単なる知識の蓄積ではなく、むしろ想像力の開放の場としてあることを考えると、「読書」という行為自体がメタファーとしてジェインの生き方そのものを表象していると言えるのではないだろうか。ロチェスターの過去を知り、行くあてもなくソーンフィールドの外に出たジェインは、自分の人生について

次のように思索する。

..... Not one thought was to be given either to the past, or the future. The first was a page so heavenly sweet—so deadly sad—that to read one line of it would dissolve my courage and break down my energy. The last was an awful blank.

(Chap. 27, p. 360)

人生は一冊の本であり、過去はそこに書き付けられたページ、そして未来はこれから書き入れられる白紙のページ、というメタファーで表わされたこの思索は、人生を「本」と「読書」と捉えるジェインの人生観を示している。そう考えると、ロチェスターとの恋愛が展開するソーンフィールドの場面はまさにジェインの読書観の実践であると見ることができる。

◆絵画と言語性 —「見ること」と「読むこと」の間

ロチェスターとの出会いから結婚に至るまでの接触の中で、「読書」に代わって頻出するのは「写生」(鉛筆によるイラスト画、または水彩画)である。幼年期のジェインの読書が本の中の挿絵を通して想像の世界を創りだすことであったことを思うと、「読書」と「写生」は想像力という仲介を通してジェインの中では同じような意味合い・作用をもっていると考えられる。

まず、ジェインの人物認識は想像の世界で写生画を描くことによって行なわれていることに注目しなければならない。リード夫人の病床を訪れたジェインはロチェスターの想像画を描き、彼への想いをますます強くする。イングラム嬢への嫉妬に燃えるジェインは、自分の自画像とイングラム嬢の肖像画を描き、その比較の内に自らの劣等性を認識することによって、自分を

戒めようとする。また、ジェインはセント・ジョンに自分が描いたロザモンド・オリヴァーの肖像画を見せて、彼の心をロザモンドに引き付けようとする。そもそもジェインには、実際に肖像画として描かなくても、人物や光景を「絵」として認識する傾向がある。たとえば、ソーンフィールド館で初めて見るロチェスターの顔は彼女の目には「記憶という画廊に持ちこまれた新しい絵」(132)であり、マーシュ・エンドでは「絵にあるような碧い目」をもったセント・ジョンを「壁にかかっている肖像画の中の一枚」(386)として観察する。同様に、ジェインはロザモンドの目を「美しい絵に見る色と形」(406)をしていると感じる。

また、ゲイツヘッドやソーンフィールドでジェインが読書をするお気に入りの場所が窓框(window-seat) (14, 223)であるのは、そこがジェインに絵画的な風景を与えてくれるからである。たとえば、ジェインがビューイックの本に空想をたくましくするのは、額縁ならぬ窓枠を通して見た11月の荒涼とした雨模様の実際の風景が「絵」となってジェインの想像力を刺激するからである。そして忘れてならないのは、反対側にカーテンに隠れた別の見たくはない「絵」(リード家の居間)があるということで、ジェインはジョン・リードの圧政に向かって自分からカーテンを開けて「絵」の中に飛び込んでいく。同様に、ジェインがリヴァーズ家の家族を初めて見るのは、家の外から窓枠を通して見た「絵」としてである。このように顔、表情、状況などを「絵」に描く、あるいは「絵」として認識することは、ジェインにとってどういう意味をもっているのだろうか。

視覚的映像を目にもたらすひとつの典型的な例は鏡である。「赤い部屋」に監禁されたジェインはふと鏡に映った自分の姿を目にして、次のように思う。

..... I had to cross before the looking-glass ; my fascinated glance involuntarily explored the depth it revealed. All I looked colder and darker in that visionary hollow than in reality : and the strange little figure there gazing at me, with a white face and arms specking the gloom, and glittering eyes of fear moving where all else was still, had the effect of a real spirit :

(Chap. 2, p. 21)

ジェインにとっての「リアリティー」とは鏡の表面に映った映像ではなく、その奥底にある「実体のない空^{くう}の影」であることに注意したい。英語の image には「鏡に映った映像」と「心に浮かぶイメージ」という別々の意味があるが、ジェインが「リアリティー」としているのは後者の方である。さらに、鏡に映った「小さくて奇妙な姿」が「自分を凝視している」という描写には、「見る者」が「見られる者」であるという主体と客体の逆転が暗示され、客体としての映像の方にこそリアリティーが存在するというジェインの映像観が表れている。

こうしたジェインの視覚的認識は、さらに彼女の言語観と結びついていく。ジェインが、ソーンフィールド屋敷を訪れた上流階級の人々への軽蔑感をあらわにして、自分とロチェスターの同質性・同等性を主張する有名な箇所にはこう書かれている。

..... I (Jane) believe he is of mine ; —I am sure he is, —I feel akin to him, —I understand the language of his countenance and movements

(Chap. 17, p. 199)

顔つきや動作という「言葉」を「読み」「解釈

する」というジェインの基本的姿勢がここに表れている。俗に「顔を読む」「表情を読む」とよく言うが、刻々と変わる顔の表情は、溢れる想像力によるロマンティックな読書を習慣としているジェインにとっては、観察され読まれるべき格好の材料である。「読む」という創造的行為によって、ジェインは読まれる対象となる人物の人格を把握していくのである。

「読書は目で始まるものだ。」(Reading begins with the eyes.)⁷⁾ とはマングェルの言葉だが、ジェインとロチェスターは共に、まだお互いの過去を告白していない出会いの初期の段階から、相手の目や視線を「読み取る」ことによってアイデンティティーを探ろうとしている。

..... he (Rochester) seemed to read the glance, answering as if its import had been spoken as well as imagined : —

(Chap. 14, p. 154)

..... at least I (Rochester) flatter myself I read as much in your eye (beware, by-the-bye, what you express with that organ, I am quick at interpreting its language).

(Chap. 14, p. 154)

..... The soul, fortunately, has an interpreter—often an unconscious, but still a truthful interpreter—in the eye.

(Chap. 27, p. 356)

ジェインとロチェスターの出会いは、それ自体が妖精物語であるが、ロチェスターはそれをさらに別の妖精物語に再構築してアデルに語る。そこではロチェスターは馬に乗って現われず、階段に腰をおろし、手帳と鉛筆を取り出して書き物をしている。(実際、ソーンフィールド

のロチェスターは常に手帳と鉛筆を携帯していることは注目すべきである。)そこに現われた「小さな物」は仙女であったが、二人は言葉に出してはひと言も語り合わず(会話はロチェスターの想像の中だけで行なわれる)、お互いに目を読み合って存在を認識するのである。

..... I (Rochester) never spoke to it, and it never spoke to me, in words : but I read its eyes, and it read mine ; and our speechless colloquy was to this effect : —

(Chap. 24, p. 300)

また、ロチェスターがイングラム嬢に愛情を抱いているとジェインが感じるのは、彼の視線が常にイングラム嬢の方に向いているためであるが、何と皮肉なことにロチェスターの視線は占いの老婆の視線に化けて、この上なく鋭く深々とジェインの目を覗き込むのである。少し長くなるが、ロチェスターの説明を引用する。

‘The flame flickers in the eye ; the eye shines like dew ; it looks soft and full of feeling ; it smiles at my jargon : it is susceptible ; impression follows impression through its clear sphere ; when it ceases to smile, it is sad ; an unconscious lassitude weighs on the lid : that signifies melancholy resulting from loneliness. It turns from me ; it will not suffer farther scrutiny ; it seems to deny, by a mocking glance, the truth of the discoveries I have already made, — to disown the charge both of sensibility and chagrin : its pride and reserve only confirm me in my opinion. The eye is favourable. (Chap. 19, p. 226)

上記はジェインの目を観察しているロチェスターの発した言葉であるが、自分を主体にした I think や It seems to me のような構文ではなく、eye (it) を主語にした文が繰り返され続けることに注意すべきである。つまり、目が主体となって語る言葉をロチェスターは「読んでいる」だけにすぎない。変装がロチェスターの姑息な手段であったかどうかは別として、一見単なるお遊びに見える「ジプシー占い」が、read という作用を通して、ロチェスターにジェインの人間性を捉える決定的な判断材料を与えている。文字通り、「占う」(read the fortune)とは「目を読むこと」(read the eyes)であり、「手を読むこと」(read the palm)にはほかならないのである。

物語のクライマックスであるロチェスターの求婚とジェインの承諾は、まさに本の「ページ」を「読む」という読書行為の原型的コンテキストの中で行なわれる。

‘You, Jane. I must have you for my own — entirely my own. Will you be mine? Say yes, quickly.’

‘Mr. Rochester, let me look at your face : turn to the moonlight.’

‘Why?’

‘Because I want to read your countenance : turn!’

‘There you will find it scarcely more legible than a crumpled, scratched page. Read on : only make haste, for I suffer.’

(Chap. 23, p. 286)

また、結婚式前日にロチェスターはジェインに向かって‘How well you read me, you witch!’ (314)という言葉が発する。この言葉は2つの点で重要である。まず、魔女が「読み手」

とされていて、ジェインと同様に、ロチェスターにとっても「読書」のメタファーが妖精物語というコンテキストの中で捉えられていることである。また、ジェインには婚礼衣装が誰によって引き裂かれたのか（つまりはロチェスターの正体）がこの時点ではまだ謎になっているので、実際にはこの言葉の内容とは裏腹にジェインはロチェスターについて「読み違い」(misreading)をしているわけであり、アイロニックな響きが伴っていることである。屋根裏部屋の笑い声の解釈に象徴されているように、ロチェスターとの恋愛はジェインには「読書」の物語であるとともに、それは同時に「誤読」の物語であるとも言えるのである。

ジェインの人物認識は頭の中で想像画を描いたり、実際に写生画を描いたりすることによって行なわれるが、このことによって彼女はその人物の目や表情を「読み取り」「解釈する」という読書の原型となる動作を行なっているわけである。ジェインにとって、「見ること」と「読むこと」は二項対立的な概念ではなく、意味生産の過程であることにおいて同義である。言葉が一つの記号表現であるように、絵、風景、顔の表情、目（さらには匂いや触覚などでさえも）はそれを享受する者に「読むこと」を強い、意味の生産を求めるのである。リーダビリティということに関して言えば、むしろ文字を読むこと以上に、絵画的・造形的描写を「読む」ことの方がより即時的で印象的な受容を可能とするようにさえ思われる。いずれにせよ、「読むこと」によるこうした生産作用は、「目を、心を表わす代弁者としないうで、むしろ他人の心をさぐる道具にしている」(387) セント・ジョンに対しては決して起こらないのである。

ところが注目すべきことは、ジェインがセント・ジョンの顔や目を「読めない」とは反対に、実はセント・ジョンの方はジェインの顔を

「読み取る」ことによってジェインの本質をつかんでいるのである。彼がジェインの性質には自分と同じように「平穩にしておれない混ぜ物」(396)が入っていると見抜くのは、次のようにジェインの顔を「読んだ」からである。

He (St John) looked at me before he proceeded : indeed, he seemed leisurely to read my face, as if its features and lines were characters on a page

(Chap. 30, p. 396)

また、ジェインがモートンの女子学校の教師になることに同意した後で、セント・ジョンは彼女が長くはモートンにいないだろうと見抜くが、それはジェインの目を「読んだ」からである。

'I (St John) read it in your eye ; it is not of that description which promises the maintenance of an even tenor in life.'

(Chap. 30, p. 398)

さらに、ジェインが描いたロザモンドの肖像画について、セント・ジョンは目の表情がよく描けているとその本質を評する(415)。セント・ジョンはロチェスターとの対比によって、多少とも過小評価されるきらいがあるが、ジェインの人格を「読み取る」ということにおいて、彼はロチェスターに決して勝るとも劣らない「読書」のプロセスを踏んでいる。問題は彼の「読書」がロマンティシズムではなくリアリズムのコンテキストにもとづいていたというだけの話にすぎない。それをもって、セント・ジョンがジェインを「誤読」していると断罪してしまうのは、いささか酷ではないかと思わざるをえないのである。

ジェインは、「外観というものは、若い者の心に、なかなか影響するもので」、「外観に無頓着だったり、人に与える印象に無関心だったりするのは、私の持前ではない」(113)と言う。ミハイル・バフチン⁸⁾が考察しているように、外貌がもつ表現機能を意識して、その美的認識を主人公の内的状態の表出とする解釈(その典型がロマン主義)は、19世紀から20世紀初頭を支配した美学の概念である。そこでは表情や人相は一つの表現美学として扱われる。そして他者の外的特徴を「読む」ことは、結局自身の内的感覚という「言葉」を「翻訳」していることにはかならない。たとえばジェインが描く自画像は、自分を他者の目から見る＝読むということにおいて、こうした表現美学を意識した自己認識の方法であり、「見る者」が「見られる者」と一致することにより彼女の絵画的・造形的美学が完結するのである。

人間や人生のメタファーとしての「読書」や「書物」の機能は、古く中世の神学書が書物として読まれた時代から見られる。「神の姿に擬せられた人間もまた、読まれる書物」であり、「開かれた書物のページを読むが如く、我々は他人の顔の表情を読み、恋人の仕草を追う」のである。そして、他人を「読む」ということは「我々の肉体の内側にあるようなイメージで説明されることを求め」⁹⁾られることであり、結局自分自身を「読む」ことにつながる。人間が書物であると見ること、世界をテキストとして読むことが、すべての人間存在の基盤となっているのである。

◆言語化による認識と「書く」ということ

ジェインの現実認識は自分の心的映像や思索を言語化することによってなされるが、ここでいう言語化とはいわゆる記号としての文字を読

み、書き、理解するというのではなく、絵画のように多義的な意味をもった表現空間を印象的・感覚的に受容し、かつそれを頭の中で主体的・積極的に解釈するという一種の読書行為のことを言う。

たとえば、ジェインがそのままでも何の問題もないローウッドの生活から出ていこうとしたのは、窓を通して丘陵を眺めながら浮かんだ「新しい奉仕」(99)という言葉の中に、積極的な意味を見つけたためである。

‘A new servitude! There is something in that,’ I (Jane) soliloquized (mentally, be it understood ; I did not talk aloud). ‘I know there is, because it does not sound too sweet ; it is not like such words as Liberty, Excitement, Enjoyment : delightful sounds truly ; but no more than sounds for me ; and so hollow and fleeting that it is mere waste of time to listen to them. But Servitude! That must be matter of fact.

(Chap. 10, p. 100)

「自由」「興奮」「快楽」と同様に、通常ならば単なる‘音’にすぎない「奉仕」という言葉は、ジェインの遍歴というコンテクストの中では「変化」と「刺激」というコノテーションを伴って積極的な意味を作り出す。

ソーンフィールドを飛び出たジェインはマーシュ・エンドに向かう荒野を「自然」という言葉で名付け、「彼女(自然)の子」である自分は、「子供の親に対する情愛」(363)を「自然」に対してもつことによって、放浪の苦しみをまぎらわせる。また、彼女は自分呼び戻す「ジェイン、ジェイン、ジェイン」というロチェスターのテレパシー的な声を、奇蹟や迷信ではなく『『自然』のみわざ』(467)であると解釈する

が、これは「自然」をテキストとして、その中に意味を読みとろうとする創造的な行為であると解釈できる。こうした言語化はジェインの頭の中で無意識的に起こっていることであり、書かれた文字としてジェインが認識しているわけではない。たしかにジェインが人生のひとつの局面から別の局面に移るきっかけとなるのは、自分が書いた手紙や履歴書（ローウッドを去るとき）、メイソンが見せた結婚証明書（ソーンフィールドを去るとき）、弁護士のブリグスが所有している遺産相続の遺言書（マーシュ・エンドを去るとき）という written documents であるが、これらはいわば道具立てとして機能しているのみで、書き言葉自体がジェインの人生に方向性を与える何らかのコンテクションをもっているわけではない。むしろ書かれた文字はジェインにとっては謎であり、理解できないものとして存在することが多い。

書かれた文字がジェインにとって「理解しがたい」のは、言葉の分節化によって、想像力によって広がるロマンティズムの世界が抑圧されてしまうからである。たとえば、玄関にある石額面に書かれている「ローウッド学院」と校訓を表すマタイ伝からの引用の碑は、ジェインにとっては何の意味もない[理解できない]、単なる文字の羅列として捉えられる。結婚準備のためのロンドン旅行にもっていくトランクの名札にロチェスターは自らの手で「ロチェスター夫人」(71)という名を書くが、ジェインにとってそれは実体のない単なる書かれた記号にすぎない。シャーロット・ブロンテが実名を伏せて小説を書いたことはあまりにも有名だが、人物や建物などを表す名称の虚構性について、ジェイン自身がそれを小説の中で実践していると言えるだろう。また、ジェインはソーンフィールドで行なわれたシャレードという言葉遊びに決して加わろうとしない。ジェスチャーを言葉に

よって定義すること自体がジェインには不可能なことなのである。

書き言葉による文字化は一見物事を定義化し、明瞭化するように見えるが、受容と認識のパラダイムの中ではむしろ意味の生成を抑圧する行為にほかならない。ジェインは自らを戒めるために描いた自分の自画像とイングラム嬢の肖像画の下に、それぞれ「身よりなき、貧しき、不器量なる一家庭教師の肖像」「才芸にすぐれたる名門の令嬢、ブラーンシュの肖像」(183-184)と書き込むが、こうした文字による定義化はむしろ逆説的に解釈の可能性を拘束し、無限の広がりをもつ表現空間を抑圧する自虐的な行為である。また、セント・ジョンがジェインの正体を知るのは、ロザモンド・オリヴァーを描いた肖像画のおおい紙からジェインのサインのある部分を引きちぎり、「インディアン・インキで私（ジェイン）の筆跡で書かれた「ジェイン・エア」という文字を読む」(426) ことによる。しかし、セント・ジョンが知る正体とは、家系的な縁故関係と財産譲渡という法的・経済的な姿のみであり、ジェインの本質的なアイデンティティーを「読み取る」ことは何ら行なわれない。文字化した名前は活字として機能するのみで、そこには「解釈すること」も「意味づけすること」も除外されているのである。最初の内、開放された名としての偽名で通していたジェインは、ここで拘束され、限定され、抑圧されてしまうのである。一貫してジェインを「妖精」や「幻」と呼ぶことによって開放された意味づけを求めるロチェスターとは、まさに正反対な認識をしているわけである。

ジェインにとって文字として書くということは、想像力によって絵画の中に多声的な言葉を読み取ることと対照的に、意味を閉じ込め、表現空間を抑制してしまう行為でしかない。常に開かれた解釈を求めるジェインにとって、「読

む」べき言葉は書かれた文字ではなくあくまでも絵なのである。言語化とは人間によって分節化された言葉を使って表現することであるが、その裏には絵やイメージというより自由で開放された視覚的表現が隠されている。それを「読み取る」には想像力の援助が必要なことは言うまでもない。

話し言葉であれ書き言葉であれ、そもそも言葉とは現実を分節化し、その一面しか表わせないという宿命をもっている。ロマンティズムの開かれた表現空間を求めるジェインにとって、言葉に内在しているこうした限界は、さぞかし歯痒く感じられることだろう。物事を「書く」場合と同様、物事を「読む」ことにおいても、そうした障害は宿命的に起きる。シャーロット・ブロンテはそれを解決するために、絵画による視覚的なリーダービリティに期待し、「読むこと」を現実認識のメタファーとして取り入れているのである。

◆まとめ

ジェインにとって「読書」とは、ヘレン・バーンズやセント・ジョンのように知識や教訓を与えるものとして機能していない。ましてや実用性・実益性を目的としたものでもない。「読書」とは何よりも読者の想像力を喚起し、刺激と変化をもたらすものでなければならない。幼少期の妖精物語との出会いは、その意味でジェインの価値観を決定づける重要な原体験となっている。

しかし、彼女の読書が真の意味をもつのは、「読書」という創造的行為が彼女の現実認識の原型的パターンとして作用しているからである。ジェインとロチェスターの妖精物語的恋愛は、読書行為の実践そのものであり、二人は主人公であるとともに、自ら作り出したページを読み解く読者でもある。妖精物語の中でジェインは

まるで「本を読む」ようにロチェスターの目を「読み」、彼の感情や人格を「読み」、自分の人生を「読み」、自然や世界を「読む」のである。彼女の恋愛観、人間観、人生観はすべて読書のメタファーの上に成り立っている。そしてそれは印刷された活字を読み解釈するという学術的・分析的な行為ではなく、絵画を「読む」ようにより感覚的・印象的・即時的な認識として捉えられている。ジェインは自伝として語る『ジェイン・エア』の登場人物であり語り手であるとともに、虚構テキストとしての妖精物語『ジェイン・エア』の読者でもあるのである。

【参考文献】

英文テキストは Penguin Classics 版 *Jane Eyre* (London: Penguin Books, 1996) を用いた。本文中の日本語訳は、遠藤寿子訳『ジェイン・エア』上・下（岩波文庫、岩波書店、東京、1993年）を基本に若干の修正を加えた。ただし、引用ページ数はすべて英語版による。また、英文の引用に付された下線はすべて筆者によるものである。

- 1) シャーロット・ブロンテの読書分野は文学のみにとどまらず、自然科学や宗教書に至るまで、かなり幅の広いものであったようである。たとえば、1834年7月4日付エレン・ナッシー宛の手紙の中で、エレンから熟読用の本の推薦を頼まれた返事として、
「詩なら誰々、歴史書なら誰々、小説なら誰々、自然史なら誰々、神学書なら誰々を読みなさい」と、分野別に作家名を挙げて講読を勧めている。

Smith, Margaret. ed., *The Letters of Charlotte Brontë* Volume One 1829-1847. (Oxford: Clarendon Press) pp. 130-131.

- 2) 『ジェイン・エア』に出てくる書物のリスト

(主なもののみ) を以下に挙げる。* は実際に登場人物が読む (または筋を聞く) 書物として、それ以外はナレーターの引用として出てくる。ただし、『聖書』と神話類は除く。数回出てくるものは初出の章のみに挙げる。

- 第1章 * Thomas Bewick, *History of British Birds*
- * Samuel Richardson, *Pamela*
- * John Wesley, *Henry, Earl of Moreland*
- * Oliver Goldsmith, *The Roman History*
- 第3章 * Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*
- * Carus-Wilson, *Child's Guide* (原典は *The Children's Friend*)
- 第4章 * Anonymous, *Arabian Nights* (この章では Arabic tales として、21章で原題が出る)
- 第5章 * Samuel Johnson, *Rasselas*
- 第8章 * Virgil
- 第11章 * Jean de la Fontaine, *La Ligue des Rats ; fable de La Fontaine* 1621-95 (アデールの書物)
- William Shakespeare, *Macbeth*
- ? ? ?, *Bluebird's Castle*
- 第13章 John Milton, *Paradise Lost*
- 第15章 John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*
- 第19章 William Shakespeare, *King Lear* (ロチェスターの台詞)
- William Shakespeare, *Henry IV* (ロチェスターの台詞)
- 第24章 William Shakespeare, *A Midsummer Night's Dream* (ロチェスターの台詞)

第29章 * Friedrich von Schiller, *The Robbers* (32章でジェインも読む)

第31章 * Walter Scott, *The Lady of the Last Mistrel*

第32章 * Walter Scott, *Marmion*

3) 家族で朗読を楽しむ習慣のあったジェイン・オースティンは、兄のジェイムズが毎晩『マーミオン』を朗読するのを聞いて、おもしろいとは思えないと、1808年の書簡に書いている。シャーロット・ブロンテはこの書簡を読んでいたのだろうか、それとも単なる偶然なのだろうか。下記、アルベルト・マンガエル著『読書の歴史』p. 142.

4) ヴォルフガング・イーザー著、轡田 収訳『行為としての読書』(岩波書店、東京、1998年) p. 24.

5) Manguel, Alberto. *A History of Reading* (New York : Viking, 1996) pp. 95-108. アルベルト・マンガエル著、原田範行訳『読書の歴史』(柏書房、東京、1999年) pp. 112-126.

6) 『ジェイン・エア』における「読書」の意味を探った批評はいくつかあるが、特に Bock は、登場人物の reader としての、また storyteller としての資質を分析することによって、登場人物の人格形成に与える「読書」の意味を詳細に考察している。この中で Bock は、ジェインはソーンフィールドで「実際の本を読む必要はほとんどない」、というのは「新しいテキストはロチェスター自身である」からであると述べている。

Bock, Carol. *Charlotte Brontë and the Storyteller's Audience* (Iowa : Univ. of Iowa Press, 1992) p. 84.

- 7) Manguel. *ibid.*, “Reading Shadows” p. 28.
- 8) ミハイル・バフチン, 『ミハイル・バフチン
全著作』 第1巻“美的活動における作者と
主人公” (水声社, 東京, 1999年) pp. 87-
343.
- 9) Manguel. *ibid.*, p. 169.